

引用導入表現 *be + like* に随伴する身体表現について

溝上瑛梨(近畿大学)

1. はじめに

本研究は、発話や思考の引用を導入する *be + like* 形式の表現性について、ジェスチャーの観点から従来の伝達動詞 *say* と比較し、豊かな表現性の一因を探るものである。引用 *be + like* の高い表現性については、以前から先行研究で指摘されてきた。例えば、Blyth, Recktenwald, and Wang (1990) は、引用 *be + like* は歴史的現在形でしばしば用いられており、そのことがナラティブに劇的効果をもたらすと述べている。また Buchstaller (2001) は、引用 *be + like* には生々しさ(vividness)が付随すると指摘している。一方で、従来の伝達動詞 *say* に比べて、引用 *be + like* は必ずしも元発話の正確な引用を志向するものではないとも言われている(cf. Blyth et al., 1990)。したがって、引用 *be + like* の生き生きとした表現性は、引用の正確性が関わる被伝達語句の言語的要素にあるのではなく、非言語的要素にあると考えられる。すでに先行研究においても、*be + like* による引用には顔の表情やイントネーションの変化、ジェスチャー等が共起する傾向が高いと指摘されてきたが(cf. Buchstaller, 2001)、実際に非言語的要素に焦点を当て、引用 *be + like* と他の伝達動詞を比較した研究は少ない。よって本研究では、そうした非言語的要素の中でもジェスチャーに注目し、*be + like* による発話や思考の引用と、*say* による引用を比べることで、その表現性を検討した。結果として、*be + like* による引用の方がジェスチャーが多く使われる傾向にあり、そのことが引用 *be + like* の表現の豊かさを支える一因であることを述べる。

2. 引用を導入する *be + like*

最初に、発話や思考の引用を導入する *be + like* について説明しておきたい。引用 *be + like* は、1982年に Schourup によって初めて学術的文脈の俎上に載せられたと言われている。Schourup が指摘した際には、内的思考の直接引用を導入するものとして使われている、との記述に留まっている(Schourup, 1982)。その後、発話の直接引用にも使用されるようになり、主に20代までの若者世代に広く使われる引用マーカーとなった(cf. Blyth, et al., 1990)。元はアメリカで発生したとされる表現であるが、現在ではイギリスやカナダ等の英語にまで普及している(Tagliamonte & Hudson, 1999)。以下に実例を挙げる。

- (1) a. She was like, “Get away!”
- b. So, I go in and sit down, and then I noticed that some guys just sat there opposite me, and I’m like, “Oh, oh, my god, no, this guy is gonna make small talk with me.”
- c. I said, “Don’t always believe everything you see or read online.”
- d. The minute you wake up, you think, “Oh, I’ve got to take my blood sugars.”

(Mizokami, 2020; 2021)

(1a)は“she”で指示される人物が、集まった男性たちに放った発言を *be + like* で引用している。(1b)の状況では、ある店舗にいた話し手が、自分一人ではなく他の客もいることに気がついた。話し手は他者とのコミュニケーションが苦手なのに、その客は自分に話しかけてくるに違いない、と考えたことを回想し、その内的思考を *be + like* で引用している。なお、この例では歴史的現在形が用いられている。(1a)や(1b)を、(1c)、(1d)と比較すると、引用 *be + like* が従来の伝達動詞である *say* や *think* と同様、被引用語句の直前に置かれ、発話や思考が直接引用されるマーカーとして働くことが分かるだろう。ゆえに、(1a)と(1b)の“she was like”と“I’m like”を、それぞれ *she said* や *I think (I thought)* と入れ替えても差し支えない。このように、*be + like* 表現とは、主に話し言葉において、自己あるいは他者の、発話や思考を引用する際のマーカーとして機能する。

3. 調査

3.1 ジェスチャーの種類

本調査におけるジェスチャーとは、McNeill (1992)に従い、発話に随伴する特異で自然発生的な手や腕の動き、を指すこととする。例えば、話し手が“and he climbs up the pipe”と言いながら手を上方に持って行く時、この手の動きをジェスチャーと呼ぶ(ibid.: 37)。McNeill は、このようなジェスチャーを4つに分類している。それぞれについて、McNeill (1992)を参考に、例を挙げつつ詳細を確認していきたい。

(a) *Iconic*

発話の内容と意味的に関係がある手や腕の動きを指す。例えば、物語を話している、主人公が木を地面に向かって曲げるシーンを説明する際、“and he bends it way back”と言いながら、何かを掴み引き戻す動作をするのがこれにあたる。この場合は、発話内容とジェスチャーは同一の事柄を表している。しかし *iconic* のジェスチャーでは、発話内容と手の動きが相補関係になっていることもある。話し手が“she chases him out again”と発話し、ある人物が別の人物を追いかけしていることを話す一方、手の動きは、その出来事で武器として用いられた傘を表す、何かを掴みながら回すようなジェスチャーをする場合を考える。この時、発話もジェスチャーも同一の出来事について言及しているが、表す事柄は少し異なる。発話は人物の追跡、ジェスチャーは武器についてである。したがって、発話の内容とジェスチャーが合わさって、出来事の記述として完成することになる。

(b) *Metaphoric*

目には見えないイメージ、または抽象的な事物を表す手や腕の動きを指す。具体的な物体や出来事を表す *iconic* のジェスチャーとは、抽象物を表すという点で異なっている。例を挙げると、“it was a Sylvester and Tweety cartoon”と言いながら、手を上げ、何らかの物体を表すような仕草をする、というものである。ここで話し手はアニメーションというジャンルについて言及し、ジェスチャーを随伴させている。ジャンルという概念は抽象的なものであり、その抽象物を表すために、手で何らかの境界を持つ物体のイメージを形成することで聞き手に提示している。つまりジャンルという、目には見えない概念を、物理的な物として示すという、一種の比喩表現になっている。

(c) *Deictic (pointing)*

具体的な事物を指差すという動作であるが、指差しをするべき事物が存在しない場合にも用いられる。むしろ、ナラティブや会話で見られる指差しのジェスチャーのほとんどは、抽象物を指すタイプであるとも指摘されている。例えば、面識のない学生同士の間で交わされた会話の際、話し手が“where did you come from before?”と言いながら、話し手自身と会話相手の間にある空間を指差しする場面が挙げられている。このジェスチャーは、会話相手が実際に、その会話が行われる前にいた物理的な場所(この場合は、会話の場所とは別の都市)ではなく、抽象的な概念としての位置を示している。

(d) *Beat*

発話のリズミカルな拍子に合わせた手の動きを指す。その際、発話のリズムからズレがあっても構わない。*Iconic* や *metaphoric* のジェスチャーとは異なり、*beat* は発話の内容に関わらず同じ形式で表される傾向にある。典型的には、手や指が素早く上下、また左右に動くものである。*Beat* のジェスチャーは、随伴する語やフレーズが、ナラティブ上、話者にとって重要だとみなされていることを示す。新たな登場人物の紹介や、行動のまとめ、新たなテーマの導入の際に見られる。例として挙げられているのは、着座の状態では話し手が“whenever she looks at him he tries to make monkey noises”と言いながら、膝の上に置かれた手を上下に動かす場合である。この例で *beat* のジェスチャーは特に“whenever”をマークしており、“she”で指示される人物が、“he”で指示される人物を見る時、彼は猿のような騒音を出す”という出来事が複数回あり、そのいずれかの個別の事象ではなく、ひっくるめて扱っていることを表している。

以上が、McNeill (1992)によるジェスチャー分類の概観である。本調査では、これら4種類のジェスチャーを念頭に、*be + like* や *say* により導入された直接引用で共起するジェスチャーの分類を試みた。

3. 2 調査手法

本調査では YouGlish(<https://youglish.com>)という検索エンジンを使用した。これは英語の発音学習を主な目的として作成、公開されたサービスである。発音の確認がしたい語句を検索バーに入力すると、YouTube 動画から、英語母語話者によって実際にその語句が使用されている部分が抽出され、発音を確認できる。検索対象の動画は、YouTube 上の1億本以上の動画で、実場面に即したリアルな発音が学習できる。さらに、英語変種ごとに検索することもでき、アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、全て、から選択できる。

今回の調査では、アメリカ英語のみを対象として *be + like* や *say* により直接引用が行われている動画場面を検索した。まず、“I was like”, “she was like”, “he was like”, “I said”, “she said”, “he said”を検索語句として入力し、ヒットした動画の一つずつ確認し、発話や思考の直接引用が行われている動画のみを選び分けた。次に、それらの動画場面の中から、腕や手の動作全体がはっきりと視認できるものを、“I was like”等のキーワードにつき20件ずつ選定した。そして、発話や思考の直接引用部分にジェスチャーが伴っているか判断し、ジェスチャーが行われている場合にはその種類を分類した。

4. 結果

集計結果の前に、ジェスチャーを伴う思考や発話の引用の実例を確認しておきたい。以下は YouGlish による検索でヒットし、ジェスチャーが共起すると判断した動画クリップのセリフ部分の書き起こしである。

- (2) a. So, I was like, “Alright! I’ll build my sand cities anew in these dry creek beds.”
 b. I said, “Hey, should I go make the bed? Are you guys ready to crash?”

(2a)の話し手は、普段は干上がっている川に大雨が降った際の感想を述べている。話し手は両手を開いて掌を上に向け、目には見えない物体を支えるようなジェスチャーを行う。“Alright”に表される、感動の湧出という抽象的な、少なくとも目には見えない事柄を、物体として示す *metaphoric* のジェスチャーの例と言える。(2b)は *say* による直接引用の例であるが、話し手は被引用語句のうちの“go”のあたりで、右手の親指で自身の後方を指差す *deictic* のジェスチャーを行っている。同様に、各用例を一つずつ確認し、直接引用とジェスチャーの共起の有無やその種類を調べた。

以下に、キーワードごとに分けた、被引用語句にジェスチャーが伴われていた用例の件数を示す。

表 1

ジェスチャーを伴う *be + like* と *say* による直接引用の件数

	I was like	she was like	he was like	I said	she said	he said
ジェスチャーを伴う用例 (各キーワード 20 件中)	16	16	14	19	17	15

表 1 から、*be + like* による直接引用でジェスチャーが確認できるのは平均約 15 件、中央値は 16 件であると分かる。一方、*say* による直接引用でジェスチャーが確認できるのは平均約 17 件、中央値は 17 件と分かる。この結果では、伝達動詞の種類によって、ジェスチャーの共起頻度はあまり変化しないと言えるだろう。

そこで、ジェスチャーの多さに着目した。ジェスチャーと「話の上手さ」について調査した磯(2001)によると、統計的な有意性は確認できないものの、聞き手は、ジェスチャーが多いとその話し手は話が上手いと考える傾向にあるとしている。直接引用に伴う表現の豊かさとは、そうした話し方の上手さも関連すると言えるだろう。このことから、出現するジェスチャーの種類に注目して調査結果を検討することとした。すると、ほとんどの用例でジェスチャーは 1 種類に限られていた。ただし、同一種類のジェスチャーが何度も出てくることは頻繁に見られた。例えば(2a)では、話し手は両掌を上に向け何かを支える動作を、被引用語句を発する間に何度か行っている。しかしここでは、そうした同一のジェスチャーの繰り返しではなく、複数種類のジェスチャーが見られる用例に着目した。

複数種類のジェスチャーが見られる用例を(3)に挙げる。

- (3) I was like, “can I hear from an MBA student? Can just one of you raise your hand and enter the conversation?”

(3)では、大学生たちにディスカッションを指示した話し手が、その学生たちに向けて言ったことを回想する場面である。“[c]an I hear from an MBA student?”の部分で、話し手は自身の顔の前方で、両手を素早く交互に入れ替えるジェスチャーを行う。これは、学生が意見を伝えるために発する音声を自身の耳で捉えるという、目には見えない音声と聴覚のやりとりを、手を音声に見立てた *metaphoric* のジェスチャーの例だと言えるだろう。次に“raise your hand”の部分では、左手を挙手する仕草を見せる。こちらは発話内容と動作に意味の関連がある *iconic* のジェスチャーと考えられる。したがってこの例では、一続きの被引用語句に *metaphoric* と *iconic* の 2 種類のジェスチャーが随伴していることになる。このように複数の種類のジェスチャーが確認できる用例の件数は次のようになった。

表 2

複数種類のジェスチャーを伴う *be + like* と *say* による直接引用の件数

	I was like	she was like	he was like	I said	she said	he said
複数種類のジェスチャーを伴う用例 (各キーワード 20 件中)	3	5	1	6	2	8

表 2 においても、*be + like* と *say* で顕著な差は見られない。複数種類のジェスチャーを伴う *be + like* の用例は平均値が 3 件、中央値が 3 件となり、*say* の場合は平均値が約 5 件、中央値が 6 件となった。

そこでさらに、被引用語句の語数とハンドジェスチャーの関係を検討することにした。複数種類のジェスチャーが見られた被引用語句の語数を算出し、より少ない語数で複数種類のハンドジェスチャーが現れれば、それだけジェスチャーが多いと判定した。例えば“*I was like*”の場合、複数種類のジェスチャーが見られたのは、全 20 件中 3 件においてである。その 3 件について、それぞれの被引用語句の語数を算出し、平均値と中央値を計算した。他の用例についても同様に被引用語句の語数の平均値と中央値を出した。

表 3

複数種類のジェスチャーを伴う被引用語句の語数の平均値と中央値(四捨五入による)

	I was like	she was like	he was like	I said	she said	he said
平均値	17	22	9	34	35	24
中央値	19	15	9	28	35	20

用例数が少ないためばらつきはあるが、少なくとも表 3 から、*be + like* による引用の方が、*say* による引用よりも被引用語句の語数が少ない傾向にあることが言えそうである。したがって、*be + like* により導かれた引用では、少ない被引用語句のうちに複数の種類のジェスチャーが現れるため、ジェスチャーが多いと言える。

5. 結論

今回は、直接引用を導く *be + like* の表現性を、ジェスチャーの観点から調査した。動画検索サイトを用いて、発話や思考を *be + like* や *say* で直接引用している用例を調べ、共起するジェスチャーについて検討したところ、ジェスチャーそのものの出現頻度にはほとんど差がなかった。つまり、単なるジェスチャーの有無のみが、*be + like* の表現の豊かさを決定づける要因ではないと考えられる。しかし、*be + like* と *say* で導かれる被引用語句の語数で比較してみると、差が生まれる可能性が出てきた。複数種類のジェスチャーが用いられた事例で比べると、*be + like* による直接引用の方が、*say* による直接引用よりも、少ない被引用語句に対して複数の種類のジェスチャーが付けられていることが分かった。つまり引用 *be + like* の方がジェスチャーが多く、そのことが、話し手の語りをより良く見せ、表現の豊かさにつながっていると考えられる。今回は検討した用例が少ないため、結果にばらつきが見られた。今後はさらに多くの用例を集めてジェスチャーに関して比較を行いたい。今回の調査は、そのための足掛かりとしての意義を持つと考えたい。

参考文献

- Blyth, C., Recktenwald, S., & Wang, J. (1990). I'm like, "Say what?!": A new quotative in American oral narrative. *American Speech*, 65(3), 215-227.
- Buchstaller, I. (2001). An alternative view of *Like*: Its grammaticalisation in conversational American English and beyond. *Edinburgh Working Papers in Applied Linguistics*, 11, 21-41.
- McNeill, D. (1992). *Hand and mind: What gestures reveal about thought*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- Mizokami, E. (2020). The comparison between *be + like* and other quotative verbs in contemporary British English. *Kindai University Center for Liberal Arts and Foreign Language Education Journal: Foreign Language Edition*, 11(2), 65-90.
- Mizokami, E. (2021). The quotative *be + like* and the historical present in spoken English. *Human and Environmental Studies*, 30.
- Schourup, L. (1982). Editor's note on [Quoting with go 'say']. *American Speech*, 57(2), 148-149.
- Tagliamonte, S., & Hudson, R. (1999). *Be like et al. beyond America: The quotative system in British and Canadian youth*. *Journal of Sociolinguistics*, 3(2), 147-172.
- 磯友輝子 (2001). 話し手の非言語的行動が「話の上手さ」認知に与える影響: 発話に伴うジェスチャーに注目して 対人社会心理学研究, 1, 133-146.